様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０４１６

研究課題名（和文）１９７０年代香港文学の多角的検証

研究課題名（英文）The Diversified Study on Hong Kong Literature in 1970s

研究代表者
西野　由希子（NISHINO, YUKIKO）

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：４０２６２３５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円、（間接経費）　　780,000円

研究成果の概要（和文）：香港文学は1970年代に大きく変容・発展したが、それにあたって大きなはたらきをしたのが、文学者・也斯である。
也斯は小説や詩の創作によって「香港モダニズム文学」をリードし、文学と美術・写真・映像・ファッション・飲食など、諸分野の芸術活動を融合させた共同制作を行った。彼が1970年代の香港の文学・文化界に方向を示し、それにより、現在の「香港文学・香港文化」が形作られていったのである。

研究成果の概要（英文）：Hong Kong Literature changed and developed in 1970s.In this process, a Poet Ye Si contributed greatly.
Ye Si led "Hong Kong Modanism Literature". And, the fine arts, the photograph, the fashion, the film, etc. were united with literature by Ye Si.
He showed the direction to the literature and the cultural community in Hong Kong of the 1970s. By his action, "Hong Kong literature and the Hong Kong culture" were formed.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学　各国文学・文学論

キーワード：香港文学　香港文化　中国文学　モダニズム文学

１．研究開始当初の背景

香港文学の研究は、主に香港の研究者によって担われてきた。1990 年代ころから、日本の研究者によっても「香港文学」研究が行われるようになり、中国への「返還」の 1997 年以降は中国でも香港の文学史的な位置づけや作家・作品を取り上げる研究が見られるようになっているが、通史的・概論的な研究、資料の収集や整理などから取り組まれる例が多く、香港の各作家の研究も含めて、十分に体系的に研究が展開されているとは言えない状況にある。

研究代表者は、これまで、香港文学史の通史的研究、西西や也斯などの作家の作品研究、「言語」という視点からさまざまな分野の研究者とともに香港の社会や文化を研究史、その変化・変容を明らかにした共同研究などを行ってきて、1970 年代が現在の香港文学のあり方を強く決定づけたと考えるようになった。

そこで、本研究では、複数の角度を設定し、香港の文学・文化にとって 1970 年代はどのような意味を持つのか、具体的に研究していくことにした。

２．研究の目的

本研究は、香港の文学史・文化史における 1970 年代の意味を明らかにすることを目的とする。この時代は香港にとっての「転換期」であり、この時代が 1980 年代から現在までの香港の文学・文化を形作ったと考える。1970 年代の文学・文化状況がより明確に把握できれば、香港というまちの成立期から現在に至る香港文学の中心にあるものはなにか、また、それがどのように変化・変容して現在に至るのか、より詳細に見えてくるはずである。

そこで、1970 年代の文学・文化にとって重要な役割を果たしたと思われる以下の 3 つの視角から、それぞれ具体的に検証を進め、その上で、1970 年代の香港を総括していく。

第一に、香港文学における「モダニズム文学」の受容および影響。

第二に、文学者と、美術・映像・写真・音楽・ファッションなど他のさまざまな芸術ジャンルの作家たちがどのように共同で創作を行い、その結果、どのような作品が生み出されたか。

第三に、香港の文学はどのようにアジアの文学・文化と関わり、影響しあったのか。特に、1966 年から 1976 年までの、中国の「文化大革命」との関係、である。

３．研究の方法

本研究課題では、先に挙げた 3 つの視角を中心に、1970 年代香港の文学と文化を検証していったが、それぞれについて、下記のような方法で調査と分析、考察を進めた。

（１）第一の視角、香港文学における「モダニズム文学」の受容および影響については 1930 年代に上海で、ヨーロッパや日本の文学の影響を受けて、中国の「モダニズム文学」を指向し、創作していた、劉吶鷗、施蟄存、穆時英、戴望舒ら、いわゆる「現代派（中国新感覚派）」の作家たちの創作からの影響が、香港の「モダニズム文学」の系譜につながっていることと、香港の作家たちが、ガルシア・マルケスをはじめとする「ラテンアメリカ文学」に大きく啓発され、それを受容して、香港の「モダニズム文学」を創作していったこと、この 2 点を研究の前提とした。

そこで、香港大学図書館、香港中文大学など香港での資料調査を行ったほか、データベースで公開されている作品目録や実際の作品等を調査し、先行研究等を参考に、上海の「現代派」と香港の「モダニズム文学」の継承関係を確認していった。

同時に、「ラテンアメリカ文学」の作家や作品について、香港ではどのように紹介されたか。それがどのように受容され、各作家の創作活動に影響していって、どのような作品が生み出されたかを調査し、整理と検証を行った。

（２）第二の視角、すなわち、香港の作家・詩人など文学者と、美術・映像・写真・音楽・ファッション等の他の分野の芸術家との共同制作については、まず、これまでに香港でどのような共同制作の活動や展覧会、パフォーマンスなどのプレゼンテーションが行われてきたのか、調査していった。

美術館、博物館、アートセンターや画廊などの記録や出版物を現地で調査、閲覧し、ＷＥＢ上の調査や閲覧も行った。

他の分野の芸術家との共同制作に積極的に取り組んできた創作者であると同時に、香港文化研究の第一人者でもある也斯本人へインタビューを行い、複数の参考資料の提供、研究遂行上のアドバイスをいただくとともに、彼が共同で制作を行った他の分野の芸術家とひきあわせていただき、調査を進めることができた。

（３）第三の視角、アジアの文学・文化との関係、特に、中国の文化大革命との関係については、香港の作家の創作作品上に現れた影響を中心に調査を行った。調査は、香港大学、香港中文大学で行い、香港中文大学の専門家にもアドバイスを受けた。

このように、各視角におけるそれぞれの対象について、資料や文献の調査、創作作品の調査を現地およびＷＥＢ上で実施し、現地でのインタビュー調査も行った。それらによって得られた資料を整理し精査して分析や読解を行い、考察を進めた。

４．研究成果

（１）第一の視角、香港における「モダニズム文学」の受容および影響については、今回さまざまに調査を行った結果、いち早く「ラテンアメリカ文学」を紹介した雑誌『四季』の存在の大きさがあらためて確認できた。

雑誌『四季』は、1972 年 11 月に也斯によって「第 1 期」が刊行され、1975 年 5 月に「第 2 期」が出版されている。

1949 年生まれの也斯は、1963 年ころから学生向けの雑誌などに創作作品を発表、やがて、コラムの執筆などを行うとともに、さまざまな世界の文学に触れて、自らの文学の方向を模索していく。1970 年に、フランスの短編小説の翻訳集、1971 年にアメリカの「地下文学」を紹介する翻訳集を出版するが、そのようにして文学の経験を積みながら、也斯は、世界の「この」作家、「この」作品をぜひとも香港で紹介したいという思いを強くし、文学仲間たちとともに『四季』を編集、刊行するのである。その作家こそが「ガルシア・マルケス」であり、『四季』第 1 期には「マルケス」と「穆時英」の特集が組まれた。また、第 2 期には、マルケスと並ぶラテンアメリカ文学の中心的作家「ホルヘ・ルイス・ボルヘス」が特集されている。

ガルシア・マルケスは、1967 年に代表作『百年の孤独』を発表、日本でも、マルケス、ボルヘス、コルタサル、バルガス＝リョサら「ラテンアメリカ文学」が注目されるようになり、作家や文学者などの間に一種の「ラテンアメリカ文学ブーム」が起きたとされている。しかし、一般の読者、世界的な評価の高まりは、1982 年にマルケスがノーベル文学賞を受賞した後のことであり、中国で『百年の孤独』の翻訳が出版されるのも 1984 年になってからであった。それらの点から見ても、也斯が 1970 年代初頭に「特集」を組んでマルケスやボルヘスを香港の文学界に紹介したこと、同じ 1972 年に也斯が『現代ラテンアメリカ小説選』という翻訳集を出版したことの意義は非常に大きい。

也斯は、『四季』第 1 期で、同時に「穆時英」の特集を組み、上海「現代派」の作家・穆時英による中国語の「モダニズム文学」作品を紹介した。そして、第 2 期には、それまでにすでに交流があった作家・劉以鬯の、モダニズム文学の代表的作品「対倒」が掲載される。「対倒」は 1972 年の 11 月から、『星島晩報・星晩版』に連載され、全部で 11 万字に及ぶ長編作品だったが、也斯はその作品を高く評価し、冗長な部分等を修訂して、この雑誌に発表しようと勧めたのである。劉は也斯の提言を受け入れ、構成、表現を見直し、連載時の 4 分の 1 の長さに書き改められた短編版として、第 2 期に発表されることとなった。現在もこの短編版が、一般に、劉以鬯の作品「対倒」として認知されている。

以上のように、穆時英ら上海「現代派」の紹介、ラテンアメリカ文学の作家・作品の紹介、「香港モダニズム文学」の創作の発表の場として、雑誌『四季』は機能し、この雑誌が、1970 年代の「香港文学」の流れを変えていくことになる。雑誌『四季』の役割は、1975 年からは、週刊の雑誌『大拇指』に引き継がれる。この雑誌は、1987 年まで計 224 期が刊行されたが、也斯は 1978 年までの最初の 3 年間、編集長を務め、その 78 年にアメリカへ留学に出発することになる。

「香港モダニズム」の作品は、劉の「対倒」以降、也斯、西西によって発表されていく。劉は、1918 年上海生まれで、上海「現代派」の作品に同時代に接していた。香港に移った後、生活のために、いわゆる「大衆娯楽小説」を大量に執筆、発表しながらも、劉は、上海「現代派」に連なる作品を指向していたのであり、「香港モダニズム文学」の最初の創作者と言える。也斯においては、1979 年の小説「養龍人師門」が、彼の「モダニズム文学」作品の最初期のものとして評価されてきたが、本研究を通して研究代表者は、也斯の「モダニズム文学」は詩の創作と小説の創作の両面からの分析がむしろ有効であり、「也斯文学」の分析の角度として、最初期から、2012 年の最後の小説作品『後殖民食物與愛情』、最後の詩集『普羅旺斯的漢詩』まで、也斯の文学は詩と小説との間で呼応しあい、表現における「実験」も内容も対応したものとして分析することで也斯の全体像が見えてくると考える。

「香港モダニズム文学」としても、小説のみでなく、詩や散文などの作品までを視野に入れて位置づけていくべきだと認識できた。これは、もう 1 人の「香港モダニズム文学」の代表的作家、西西についても同様で、彼女の場合は、1974 年の『我城』が、ガルシア・マルケスらラテンアメリカ文学、モダニズム文学の影響を受けて書かれた作品、主人公の目をとおして 1970 年代の香港を描き出した代表作とされてきた。そのことに加えて、彼女の場合もコラムや詩の作品と総合的に位置づけ、そのうえで、「香港モダニズム文学」の系譜として整理したい。

以上のように、本視角に基づいて調査、文献の閲読、分析を行ってきた成果を論文として発表する。基本的な事項や文献、翻訳や創作の関連作品については、目録として整理しているので、論文の資料として発表した後、「『香港モダニズム文学』関連文献目録・資料」として公開する。

（２）第二の視角、香港の作家・詩人など文学者と、美術・映像・写真・音楽・ファッション等の他の分野の芸術家との共同制作については、也斯の助言、資料提供、紹介により、研究を進めることができた。

香港での調査の際に、也斯と共同で制作に

取り組んできた芸術家たちに直接インタビューを行うことができ、また後述する「香港書展（香港ブックフェア）」の期間には、也斯を囲んでくつろいだ雰囲気で語り合う芸術家たちの、ふだんの、自然な姿にも接することができ、研究代表者にとってたいへん貴重な機会となった。

この部分においても、也斯本人が 1970 年代から取り組んで来た他の芸術家たちとのコラボレーションが、香港の文化界・芸術界に常に「波」として受けとめられ、その「波」が広がっていくように、香港において、異なるジャンルの融合、共同での創作、新しいスタイルでの創作の「発表」、が行われるようになったことがわかった。結論を言えば、その「波」を起こしていたのは、ほかでもない、也斯その人であり、也斯という「要」の存在を中心において、香港のさまざまな芸術家たちの見取り図を描くことが可能になる。

これについては、也斯という人が、そもそもたいへん広範な分野で創作を行い、常に柔軟に、新しい分野への関心を持ち続けた、希有な「文学者・芸術家」であったこと、1970 年代は、彼にとっても最初の「試行」の時代であり、この時代の「実験」「試行」「模索」が本人にとっても、また、香港のその後の文化・文学にとっても大きな影響を与えたのだと言える。

也斯は、詩人、小説家、散文作家であり、評論家であった。大学で教鞭を執る研究者としては、詩を中心とした中国現代文学、映画や芸術から食までを視野に入れた香港の現代文化の諸相、世界の文学・芸術・文化・思想についての比較文化・比較文学といったテーマですぐれた研究を行い、学生・後進を指導された。そして、さまざまな「文化交流」の場を創造し、主催した。

2012 年 7 月、「香港会議展覧中心（香港コンベンション＆エキシビションセンター）」で開かれた「香港書展（香港ブックフェア）」で、也斯は、「2012 年度の作家」に選ばれた。この「今年の作家」は 2010 年からはじまり、最初の年が劉以鬯、2011 年が西西、2012 年が也斯であったことは、彼ら「香港モダニズム文学」の作家 3 人が、いかにその後の香港文学に大きな影響を与えたかを物語るものとも言える。この 2012 年の会期中、也斯の創作についての討論会が開かれたほか、これまでの也斯の創作の道のりを出版物や資料、さまざまな「コラボレーション」や「パフォーマンス」の映像や画像等の資料で振り返り、再現する「特別展示」も行われた。この「特別展示」のために、これまで入手が困難であった各種の資料が掘り出されて展示され、閲覧することが可能になったのは、本研究の助けになった。

また、7 月 21 日に開かれた「也斯　―多語文詩朗誦会」（「多言語による也斯の詩の朗読会」）では、研究代表者も「朗読者」として招聘され、也斯が水戸を訪れた際に創作した詩「あんこう鍋」など、日本との関わりの深い作品の日本語での朗読を担当した。この会では、也斯本人が「広東語」での朗読を行い、英語、北京語、スウェーデン語、ドイツ語、フランス語など、あわせて 9 つの言語によって、也斯の作品が朗誦された。

また、「対話」をキーワードに開かれた検討会には、これまで也斯とともに共同での創作にあたってきたさまざまな分野の芸術家たちが集まり、也斯の創作について彼らの思いや共同制作の背景を語る貴重な機会となった。

これらの機会に行った調査等をもとに、也斯を中心に、香港でどのように文学と他の芸術ジャンルとが融合し、協働して現在に至り、香港独特の「文化状況」を作り出すことになったか、資料等整理し、関連事項の年表を作成することができた。

（3）第三の視角、特に、中国の「文化大革命」との関係については、文献資料の調査からはじめ、「文化大革命」当時の「同時代」における状況認識の難しさ、創作や言論における香港の文学者の慎重な態度が確認できた。この結果は予想されていたことでもあり、そこで、香港の作家の創作作品上に現れた影響という点に焦点をしぼって調査を行っていくこととした。

創作においては、登場人物の設定、描写、発言などに、文化大革命との関連をにおわせる、背景として用いる、ことばの二面性を利用して表現する、といった「現れ方」がピックアップできている。

こういった傾向は、也斯の小説など「香港モダニズム文学」の作品群でより明確であるが、その点に関しては、「モダニズム」の作品は、いわゆる「リアリズム」の作品よりも、社会情勢への批判や作家本人の思想を表現しやすいということ、だからこそ、これらの作家はそもそも「モダニズム」の作品を指向し、その表現方法を選択して創作している、という表裏一体の理由をあげることができる。

香港の創作作品における「文化大革命」の影響、あるいは、香港文学と「文化大革命」との関係は、これまで香港の研究者も含めて、取り組まれていない課題であり、研究代表者が今回行った調査と分析は、「文化大革命」の文学・文化面からの研究において、意味を持つものと考える。本研究の成果は、論文によって発表していくが、「香港文学と文化大革命」というテーマについては、さらに検討、分析が必要であり、今後も継続して調査、研究していきたいと考えている。

（4）以上のように、1970 年代の香港文学を、主に 3 つの視角から検証してきたが、本研究を通して、1970 年代が香港文学・文化の重要な「転換期」となったのは、也斯という文学者の存在の大きさ、彼のはたらきによるもの

であることを、あらためて、確認することができた。

也斯の創作と彼の成した「しごと」は、現在、「対話」ということばで表現され、評価されるようになっているが、「対話」の前には、その「対話」の相手と出会い、なんらかの交流を行い、そのうえで「対話」する、という過程がある。

1970 年代、也斯は、香港の文学・文化界において、対話の相手となる対象との「出会い」を設定していったのだということができるだろう。その対象は、世界のさまざまな文学・文化の中で、也斯本人が選び取っていったすばらしい作家や作品、芸術ジャンル、であった。

也斯は、多くの芸術家と自由に交際し、さまざまな芸術ジャンルを軽やかに融合させて、香港独特の創作環境、文化状況を作り出していった。その功績の大きさは、香港の文学・文化界では、この数年の間に、特に強く意識されるようになり、ふさわしい評価もされている。そして、早すぎると感じられる 2013 年 1 月の也斯逝去の後、香港では、彼の友人や後輩たち、すなわち香港の文学者、芸術家、研究者によって、彼がこれまで果たしてきた功績を忘却させず、これまで彼がリードしてきた活動を後退させることなく引き継ぎ、次の段階に発展させていこうと、ただちにさまざまな活動が企画され、実行されている。

本研究では、研究成果の社会への還元として、すでに研究期間に、招待講演、公開講座、ラジオ放送や、一般向けのメディアへの執筆等によって、香港の文学や文化状況、1970 年代の香港について、也斯の文学を中心に、紹介等を行ってきた。このような発表、研究成果の公開を今後も続けていきたい。同時に、也斯や西西など、本研究課題で取り組んで来た「香港モダニズム文学」の作品の、翻訳による紹介も行っていきたいと考え、準備を進めている。香港文学の日本語訳は、非常に少ない現状で、本研究の成果をいかした大切な仕事の一つと考えている。

また、現在、香港の文学の創作や文化・芸術において、也斯のしごとの継承が大きな動きになってきていることについては、本研究課題の延長にある研究テーマとして、今後も研究を継続していく。

そのうえで、本研究で取り組んで来た「1970 年代の香港文学の多角的検証」の次の段階としては、也斯本人の創作についての研究をさらに深く掘り下げ、也斯が行ってきた「詩と小説」の相補的な創作活動に、「香港文学」の特徴そのものを重ね合わせて読み解いていくこと、也斯は「食」と「愛情」によって、彼にとっての「香港」を描こうとしたが、都市「香港」はそのまちの変遷の中で、香港文学の作家たちによってどのような「文学形象」として表現されてきたか、系統的、体系的に分析、分類する研究などに取り組みたいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 西野由希子、『「食」をモティーフに香港を描く　－也斯「ＦＯＯＤＳＣＡＰＥ」から『後植民食物與愛情』へ』、季刊中国、109 号、62－76、2012、査読なし

〔学会発表〕（計４件）

① 西野由希子、『也斯のめざした「後植民」文学』、中国 30 年代文学研究会、2013.12.12、お茶の水女子大学
② 西野由希子、『也斯の詩、香港の文学』、大分県詩人連盟「ポエトリーアゴラ 2013」、招待講演、2013.11.30、大分市コンパルホール
③ 西野由希子、『也斯の香港　－『後植民食物與愛情』を読む』、お茶の水女子大学中国文学会、2013.7.6、お茶の水女子大学
④ 西野由希子、『香港の『今』を描き続ける－也斯の文学を読み解く－』、奈良大学総合研究所研究助成「中国語新聞『大公報』と 20 世紀の中国本土と香港の社会」研究会、招待講演、2012.12.15、奈良大学

〔その他〕

① 市民向けコミュニティ紙への執筆、西野由希子、「『対話』から生まれる」、「アルベトレッペ通信」第 3 号、2012.12、アルベトレッペ発行
② ラジオ放送への出演、西野由希子、「也斯と彼の詩『あんこう鍋』」、茨城放送 notes「アルベトレッペ通信」コーナー、2012.9.15
③ 也斯の詩の日本語朗読、西野由希子、「也斯　－多語文詩朗誦会」（「多言語による也斯の詩の朗読会」）、香港書展（香港ブックフェア）、2012.7.21、香港会議展覧中心（香港コンベンション＆エキシビションセンター）

６．研究組織

(1)研究代表者

西野　由希子（NISHINO YUKIKO）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：40262357

(2)研究分担者

無し

(3)連携研究者

無し